

自著と
その周辺

**Tetsuji Nagata : Chapter VI. Protein synthesis in hepatocytes
of mice as revealed by electron microscopic radioautography**
pp. 133-161, In, Protein Biosynthesis

T. E. Esterhouse and L. B. Petrinis, eds.

Nova Science
Publishers
New York
USA

A 5 版, 358pp, 2009
\$ 116.00

本書は米国の自然科学書出版社 Nova Science Publishers 社から2009年2月に発刊された、生体内蛋白合成に関する医学生、医学研究者向けの英文国際的参考書である。同社は20世紀末に発足した新興出版社で、従来は社名のとおり広く自然科学書の出版を行っていたが、最近は医学書の出版にも乗り出し、私は最初一昨年2007年4月に同社の社長 Frank Columbus 氏から突然メールを受信し、肩書きには同社社長兼編集長と書いてあったが、私が加齢に関する論文を多数発表しているの、同社が現在企画中のヒト特に女性の加齢に関する単行本の一部を分担して欲しいとのことで、本の題名は Women and Aging であり、広い分野からの論文を掲載したいので、私からも協力していただきたいとの内容であった。私は、以前から動物実験、主としてマウスを利用して、動物の各種器官を構成する細胞の加齢を、組織細胞化学的に研究してきたが、ヒトの細胞に関するデータはなく、すべて実験動物のものであるが、それでも良いかと尋ねたところ、実験動物のデータを書いて欲しいとの返事で、マウスに核酸蛋白等巨大分子合成の前駆物質を RI 標識して取り込ませ、肝細胞を電顕ラジオオートグラフィーして、雌雄を比較した結果について寄稿することを約束した。原稿提出の期限は2007年12月との指示で、最初に抄録を6月末までに提出することを求められ、続いて本文と図表を12月末までに送ることを約束して、夏から執筆にかかり、私は現在も長野市内の信州医療福祉専門学校の専任教授を務め、毎週2、3回は長野に通勤しているの、その合間に原稿を書き、また秋には電顕、組織化学、解剖学等の国内の学会と、2007年には5年に一回の国際ラジオオートグラフシンポジウムが中国で開催され、オルガナイザー座長をつとめるために出国したので、原稿が予定より遅れて、12月に図表を揃え、文献を付して、結局翌2008年1月下旬になってから送ることができた。ところが、この原稿を執筆中でまだ完了していない2008年1月10日に、また Frank Columbus 氏からメールを受信し、原稿の督促かと思ったところ、そうではなく、別の本の企画で Protein Biosynthesis と題する本の分担執筆を依頼され、2月までに抄録提出を求められたので、1月末に遅れていた最初の原稿を出すと同時に次の企画も引き受ける返事をして、肝細胞に関する蛋白合成について毎年学術振興会から文部科学省科学研究費（奨励研究）を受領して、電顕ラジオオートグラフィーにより最近集中的に研究している肝細胞糸粒体の蛋白合成について解説することにした。原稿締切は9月までと希望されたが、2008年11月には前年から依頼されていた第9回アジア太平洋国際電子顕微鏡学会の高圧電顕の医学生物学への応用と題するシンポジウムのオルガナイザー座長を務めるため、招待講演者との連絡、抄録集の編集で多忙であり、さらに会期の11月には韓国で開催される学会に出席する準備をしながら、執筆を進め、10月に学会に出発する直前に原稿を完成して発送した。その間、10月になり、最初の原稿の校正刷りが送られて来て、図表はまだ挿入されておらず、本文と文献表のみの校正を急いで行い、返送しておいたが、その後、再校は11月になって、私が国際学会に出発する直前にも送られてこなかったの、そのまま学会に出て帰国した。12月になり、今度は2冊目の本の校正刷りが送られて来て、これも図表のない本文と文献表のみの校正を終わり返送したが、それから1週して最初の本の再校が送られて来て、今回は図表の大部分が本文の間に挿入されていたので、位置を確認したところ、全部で12ある付図が3個足りないことがわかり、折り返し挿入されていない図について至急挿入してもらう1度再校を送るように編集部へ指示した。ところが、2、3日後に再びメールの返信があり、挿入されていない図3個を探したが、編集部にも、印刷部にも見つからないので、もう1度送って欲しいと返事で、このようなことは私が今まで何十年間論文や著書の原稿の印刷を日本国内、欧米諸国の出版社から行って来たが、経験したことはなく、驚いてとにかくもう1度、同じ図を3枚メールの添付書類で送信した。年明けに2冊目の本の再校が送られて来て校了し、印刷は2月とのことで出版を待つばかりとなったが、最初の本の校正が遅れ、1月中旬になって再び三校が送られて来たので、確認したところ、また同じ図3個が欠落していたので、驚いて再度まだ後から送った図が3個挿入されていないと連絡した。この時に、昨年以来、編集、印刷について時々

編集部から受信した 이메일을全部出して見て調べた結果判明したことは、原稿の依頼は最初だけ社長兼編集長の Frank Columbus 氏からであったが、その後の連絡はすべて他の編集部員の名前で、いろいろな肩書きがついているが、first name が Susan, Stephanie, Nadya, Dominic, Maya 等約10名の全部女性の名前であることがわかった。しかも、返信者がその都度次々に変わり、私は例えば Susan から 이메일を受信すると、Susan 宛に返信したが、それに対する返事がその次には Stephanie からきて、次に私が Stephanie に返信すると、その次には Nadya から返信されるという具合で、編集部員が多すぎて、著者との連絡が社内でたらい回しされており、中で良く連絡が取れているのか疑わしい状況であることがわかった。結局、図の一部を誰かが受け取ってどこかへやっつけてしまい、もう1度送ったのに、また紛失してそれが2回続き、現に編集部には探しても出てこないのが事実であるので、最後に連絡をよこした Dominic に、2月中旬になり、私は3度目にまた同じ図を3枚 이메일で送信せざるを得ない事態となった。その後、しばらく連絡がなかったのに、今度は両方ともうまく進行していることと想像していたが、3月10日になり、2冊目の本 Protein Biosynthesis が先に完成して、ハードカバーの厚い本が1冊航空便で送られて来た。

この本は題名のとおり、ヒトを含む哺乳類から原生動物までの各種の器官の上皮組織、結合組織、筋組織、神経組織等の各種の細胞の蛋白合成を13章にわたって展望した総説論文集で、21人の世界各国（日本3章5人、米国4章6人、ギリシア1章2人、ベルギー1章2人、ドイツ1章1人、チェコ2章2人、ロシア1章3人）の著者が分担執筆している。単著の章と共著の章があるにで、章と人数は一致しない。しかし、この数値はこの分野における国際比較を現しているのであろう。第6章の私の論文は、信州大学在任中の平成初期から、定年退官後最近までの約20年分の肝細胞の蛋白合成について、 ^3H で標識した数種類のアミノ酸、 ^3H -glycine, ^3H -leucine, ^3H -proline, ^3H -hydroxyproline 等を実験動物に注射後、肝細胞のラジオオートグラフを作成し、肝細胞の核、細胞小器官内に取り込まれ、蛋白合成の材料となり、一部は細胞外は出て行く現像銀粒子の様子を電子顕微鏡で観察し動物の加齢との関係から定量的に解析した結果について、自分の原著論文約70編と他の著者の業績約30編を引用して展望した。この書の編集者 T. E. Esterhouse 教授と L. B. Petrinis 教授はともに米国の New York 大学教授で、私は昨年までは全く交際がなく未知の方々であったが、お二人とも生化学者であるとのことで、本書13章のうち、顕微鏡を使った電顕ラジオオートグラフィにより、蛋白合成を形態学的に観察し、顕微鏡写真を示した成果は私の章だけで、他の12章はすべて細胞構造蛋白, peptide, mRNA, gene expression, 分泌蛋白, 加齢, 発癌等の蛋白合成に関する生化学的論文であった。著者の21人のうち、解剖学者は私一人だけで、他の20人は全員各地の大学医学部、農学部、理学部、研究所等の生化学者であった。他の12章の内容は、すべてが生化学的論文であるが、私の形態学的論文を含めてすべて動物細胞の蛋白合成について、最新の知見を集めて総説的に展望した論文集であり、現時点における蛋白合成についての医学生物学的研究の国際的な現状を把握するのに、適当な参考書と考えられる。この本は昨年（平成20年、2008年）1月に、突然 이메일をいただき、大急ぎで執筆した原稿が約1年で出版されたので、この種の単行本としては私の経験ではかなり早く完成したが、急いだ結果か、私が初校で指摘し、再校でもまだ訂正されずに再度訂正した幾つかのミスプリント例えば ^3H の3が上付きになっていない3Hのままの箇所、mm（ミリメートル）を μm （マイクロメートル）に訂正しても直らなかった箇所等が数カ所残っており、校正がお粗末であったと言わざるを得ないが、これとは全く逆に一昨年4月同じ出版社から依頼されて、先に送った本の原稿は2年たち、校正が終わっても出版されないという奇妙な現象を初めて経験した。先日、この本を受け取ったので、先の本はどうなっているのか Columbus 氏に問い合わせたが、しばらく返事がなく、再度問い合わせたところ、印刷が遅れているとの簡単な返事であった。原因が出版社内の問題なのか、分担執筆者の問題なのか不明であるが、最近の米国の斜陽化を象徴している現象の氷山の一角を垣間見たように感じた。いずれにしても、本書は2008年の時点における各種動物細胞の蛋白合成に関する研究の集大成であり、世界の医学生物学関係の学生、研究者にしばらくは利用されるであろうことを期待したい。

（信州大学名誉教授 永田 哲士）